
造られた神

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
造られた神

【Nコード】
N5702H

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
遙かな未来。進化した文明を築き上げた人々は遂に自分達の手で神を造り上げた。しかしその神はただひたすら傲慢な絶対者だった。傲慢な神という存在を扱った作品です。

第一章

造られた神

人々は進化した。その文明は最早何でもできるかのようだった。人々はその文明を使い思うがままのことができるようになっていた。それこそ時間を飛び越えることも無から有を作り出すことも。まさに思うがままだった。

しかし一つだけ不安なことがあった。自分達は何もかもできるようになった。しかし。その彼等を導くべき絶対の存在がいなかったのだ。

「神がない」

誰かが言った。

「神がないのだ」

「神がか」

「そうだ、神がないではないか」

こうした言葉が出て来たのであった。

「我等は何でもできるようになった」

「うむ、確かに」

「それはな」

このことは他ならぬ彼等が最もよくわかっていた。確かに彼等の文明は何でもできるようになった。できないことはないと思える程であった。

しかし。その神がないことに気付いたのだ。自分達が崇め絶対と信じそれと共に導いてくれる神がだ。その神がないことに気付いたのである。

「それではどうする？」

「神がないとなると」

人々はあらためて考えだした。神がないのならどうするべきかと。ここでその何もかもできる文明のことから一つの案が出された

のであった。

「造ろう」

これであつた。

「神を造ろうではないか」

「神を造るだど？」

「そうだ。造るのだ」

この案が出されたのである。

「我々でな」

「神を造るといふのか」

「何、簡単だ」

最初に言つた者がまた言つた。

「機械で造る」

「機械でか」

「そうだ、我々の文明をもつてすれば容易いことだ」

こういう話になるのだつた。

「機械でな。これでどうだ」

「そうだな」

「悪くないな」

周りは彼のその言葉に頷く。皆それで賛成だつた。

「では造ろう」

話はすぐに実行の段階に移つた。既にアンドロイドの類が造られてきていたので機械の神を造ることなぞ造作もないことだつた。人格までインプットされ頭脳はこの時代で最高の、しかも進化する機能まで備え付けられたコンピュータが使われた。人の形をしているがあえて人との区別化をはかりその外見は機械そのものであつた。こうしてその機械造りの神が誕生したのである。

「私は誰だ」

「神です」

人々は彼をこう呼びその前に跪いた。

「貴方は神です」

「神なのか」

「そう、神です」

「神・・・・・・・・」

神と聞いて彼は最初何かわからなかった。しかし既にインプットされていることを思い出してこうしたことを言い出したのだった。

「神は人の上に立つもの」

「その通りです」

「御前達是人」

その跪く彼等を見て言った。

「そして私は神」

「はい、ですから」

「私は御前達の上に立つ」

まずはこう言ったのだった。

「そして御前達を支配し治めるものだ」

「その通りです」

「ですから我々を」

「わかった」

彼は人々の言葉に頷いた。そのうえでこう告げたのだった。

第二章

「私は御前達を治める」

「はい」

「そして」

彼はさらに言うのだった。その精巧であるがあくまで機械のものであるその口で。人ではなく神としての言葉を発するのだった。

「私達を導こう」

こうして彼は神となった。神は人々のありとあらゆることを律していった。彼は法律となり信仰となった。人々はありとあらゆることに関して彼の言葉に従いそのうえで生きていった。誰もがこれまでは全く違う生活にまずは満足していた。

「神がおられるようになってから」

「何もかもが楽になったな」

「考える必要がなくなった」

何をするにあたっても神の言葉を聞いていればそれでよくなったからだ。確かにそれは極めて楽なことであった。考えずに済むのだから。

「しかも間違いはない」

「そうだ、神は間違いを犯されない」

信仰のもとでの言葉であった。

「その間違いを犯さない神の下で生きていける」

「何という喜びだ」

人々はそれで満足していた。神は確かに優れた統治を行い人々は全てにおいて満ち足りるようになった。神がいなかった頃とは全く違うようになっていた。そうした社会が続いていたある日のことだった。

神は言った。いつものように。

「子供を皆私に仕えさせる」

こう言ったのだ。

「そして私を崇めさせるのだ」

「それは素晴らしい」

「それでは是非」

皆この言葉にも笑顔で従った。こうして人々は皆子供達を神に捧げた。しかしここで誰もが思いも寄らなかったことが起こったのだった。

子供達は神の下で皆一つの屋根で生きることになった。親から引き離されて。子供を愛する親達はこのことに戸惑いを見せたのだ。

「子供達と離れて暮らすのは」

「まだ幼いというのに」

こう言って自分達の子供を神に引き渡すことを渋る親も出て来た。しかし神はそういった親達に対して厳しい声で言うのだった。

「それは許されない」

こう言ったのであった。

「子供は私に仕えさせる。全ての子供達は」

神の考えは変わらなかった。

「だからだ。それはならん」

こうしてそういった親達からも次々と引き離され子供達は神の下に集められ一つの大きな白い家で生きることになった。親は彼等と出会うことはできず子供達は神を親として生きようになった。もつと言えば神を絶対者として生きるようになったのである。

親達は子供に会えないことを嘆き悲しむようになった。そうしてある親が言った。

「子供に会いたい」

子を思う気持ちとして当然であった。

「子供に会いたい」

「また一緒に暮らしたい」

そう思う親達は増えていった。しかし神はそうした親達に対して言うのだった。

「諦めよ」

こう。

「私は神だ」

そして次にはこの言葉を告げた。

「神に逆らうことは許されない。子供達に会うことはできない」

「ですが」

「それでも。私達は」

「全ては私のものである」

反論しようとする彼等に対してまた告げた。

「全ては。だからこそ私に逆らうことはできないのだ」

「では子供達は」

「そう、私のものだ」

彼にとつては当然の論理であつた。

「私のものだ。だから私が使う」

育てるというのではなかった。

「御前達も然り。これ以上の言葉は許されない」

こう言つて彼等を下がらせた。しかし話はこれで終わりではなかった。

神は続いて言つた。そうした親達を集めよと。

「私に逆らう者達である」

神は彼等をこう定義付けた。

第三章

「神に逆らうことは許されない」

「それでは」

「まずその子供達の親を集めよ」

こう人々に命じるのだった。

「そして子供達をだ」

「わかりました」

人々はまた彼の言葉に頷いた。神はそのうえでまた人々に命じるのだった。

「次に竈を用意せよ」

「竈を？」

「そうだ。何もかもが入るだけの竈をだ」

彼は命じ続ける。

「そうした竈を作れ。よいな」

「それで一体何をされるのですか？」

「罰を与える」

彼は言った。

「私に逆らう罰をだ」

この言葉によりそうした親達とその子供達が集められた。親達は縛られそのうえで一つにされた。子供達もまた縛られていた。彼等の前にはその巨大な竈があり赤く燃え盛っていた。

神はその彼等に対して告げた。人々が見ているその前で。

「これが罰である」

まずはこう。

「神に逆らった御前達に下す私の罰なのだ」

「罰……」

「そうだ、罰だ」

神は告げた。そのこの時代から考えるとあまりにも古風な、それ

でいて途方もなく巨大で威圧感に満ちたその竈を眺めながら。

「神は人に罰を与えるもの」

彼はまた言った。

「その罰とは」

「一体それは」

「この子供達を竈の中に投げ入れよ」

神託だった。

「竈の中にだ。そして焼け」

「なっ・・・・・・・・」

皆それには言葉を失った。子供達を竈の中に入れる。それは即ち焼き殺すということだ。誰もがそれを聞いて哑然として言葉を失ったのである。

「子供達を竈に入れるのは」

「それは。幾ら何でも」

「この世で最も犯してはならない罪は神に逆らうことだ」
だが神はこう言うのだった。

「それをした者への罰は当然だ。だからだ」

「しかしです。子供達に罪はありません」

「親達はともかくとして」

子供達への助命嘆願であった。彼等としては子供達だけは何としても助けたかったのだ。しかし神はその考えを変えはしなかった。

「逆らうのなら」

その機械の目で何とか子供達を助けようとする人々を見据えて言った。

「御前達の子供達も同じようにする」

「我々の・・・・・・・・」

「わかったならば従え」

彼はまた言った。

「私にだ。神にだ」

「はい・・・・・・・・」

一人がまず頷いたのだった。

「それでは。今から」

「子供達を」

「皆竈の中に投げ込むのだ」

感情なぞ何一つとしてない。機械そのものの声でまた彼等に告げた。

「そして焼くのだ。いいな」

「わかりました」

「それでは」

人々は神に従うしかなかった。こうして子供達はその焼ける竈の中に投げ込まれた。炎の中に投げ込まれていく子供達の断末魔の悲鳴とそれを見て泣き叫ぶ親達、そして焼け焦げる匂いと煙が辺りを支配した。しかしこれははじまりでしかなかったのだった。

神はそれからも己に逆らう者がいると見ると容赦なく子供達を焼いた。焼かれる子供達は増えるばかりで生き残った子供達は完全に神の僕となった。彼等は神を唯一のものとし親ですら監視し密告した。それによりまた焼かれる子供達が現われる。人々は最早希望も何もかもを絶たれてしまった。

そうした時代がどれだけ続いたかわからない。全てのものは神に捧げられ人々は食べるものさえなくなろうとしていた。神は何も食べはしないがそれでも彼は捧げることを要求したのだ。飢え死にする者がいても彼はそれを意に介することはなかった。

「人は我の為にある」

彼はいつも言った。

「その人が我の為にあるのは当然だ」

こう言うのだった。人は死ぬばかりで楽しみも何もかもなくなってしまう。そしてある時神はまた人々に対して神託を下したのだった。

「巨大な塔を造れ」

今度は塔であった。

「天にまで届く塔をだ。いいな」

「わかりました」

最早誰も逆らう気力すら失っていた。そのうえでその巨大な塔の建築に入った。食べるものもない人々はその建築による重労働で次々と倒れていく。しかし倒れたそばから成長した子供達や機械達に電気鞭で打たれ起き上がらせられ働かされる。死ねばその場で捨てられる。そうした中で働かせられた。他の仕事よりもそれが優先され全てが神の為にあるのだった。

こうして塔が建った。多くの人々の犠牲の下に。そのうえで神はそれを祝う為に宴を開いた。しかしそれは人々を労うものではなかった。己を讃える為だけのものではあった。

第四章

そこにおいて彼は言うのだった。またあの巨大な竈を出して。

「子供達を投げ込め」

今度は罰ではなかった。

「我への祝いだ。子供達を投げ込め」

「何故ですか？」

「罰ではないというのに」

痩せ細った人々は彼に対して問うた。今度ばかりは納得がいかなかったからだ。

「気紛れだ」

これが彼の返答だった。

「我はこの祝いの場で子供達の悲鳴が聞きたい」
だからだというのである。

「だからだ。投げろ」

「それは」

「投げ込め」

拒む人々に対して命じる。

「すぐに投げ込め。さもなければ御前の子供を投げ込む」

「私の子供を」

「そうだ。さもなければだ」

こう一人に言うのだった。

「投げ込まれなくては投げ込め。いいな」

「私の子供は」

しかしその一人は言うのだった。見れば痩せ衰えた中年の男だ。彼は弱々しい声ながらもそれでも神に対して言うのだった。

「もう皆。焼かれてしまいました」

これが彼の返答だった。

「竈の中で。ですから」

「ですから。何だ」

「それに従うことはできません」
遂に言ったのだった。

「どうしても」

「ならば御前が飛び込め」

神はそれを聞いても動じず言った。

「御前がだ。早く飛び込むのだ」

「いえ、私は飛び込みません」

しかし彼はその命をはねつけた。

「もう。私は貴方を神とは思いません」

「何っ」

「もう沢山です」

顔をあげて言った。

「ですから。飛び込むのは貴方です」

言葉と共に神を突き飛ばした。痩せ細っているがそれでも渾身の力で。竈の側に立っていた神をその中に突き飛ばしたのだ。

それを受けた神は竈の中に消えた。何も言わずただ竈の奥から金属が落ちた音がした。それから暫くして派手な爆発が起こった。神は炎の中で死んだのだ。

「死んだ？」

「神が」

人々はその竈で起こった爆発を見て言い合った。

「まさかとは思うが」

「神が」

「いや、死んだ」

一人が言った。

「神は死んだのだ」

また周りの人々に対して言った。

「今。確かに」

「神が死んだのか」

「確かに」

「間違いない。竈の火を消してみればいい」

その言葉によって竈の火が消されその中が確かめられた。残っていたのは神の残骸だけだった。炎の中で爆発し頭だけが残っていた。黒焦げになった頭だけが。

「確かに。神のものだ」

「それではやはり」

「神は死んだのだ」

またこの言葉が出されたのだった。

「これでな」

「死んだか」

「ああ、死んだ」

その黒焦げになった頭を見ての言葉だった。

「これでな」

「じゃあもう苦しめられることはないんだな」

次に人々が言葉に出したのはこのことだった。

「これで。神が死んだのなら」

「そうだな、ない」

「死んだのだから」

次にこのことが確かめ合わされることになった。神が死んだことにより彼等が苦しめられることはなくなった、このことが確かめられたのだ。

「もうこれでな」

「そうか」

人々はこのことを確信すると安堵の息を出した。そしてそのうえで言うのだった。

「よかった。これで昔のような生活に戻れる」

「しかしだ」

だがここで。一人がその神だった存在の頭を見て言ってきた。その機械の頭を。

「神も。こうして壊れてしまえばただの機械だな」

「ああ、そうだな」

「機械に過ぎない」

人々はその壊れた機械を見てまた言い合った。

「こうなってしまうばな」

「本当にそれだけだな」

「最初からそうだったのかもな」

次に出た言葉はこれであった。

「我々が造った機械だからな」

「そうだな。我々が造った」

「ただの機械だった」

皆神の正体に気付いたのだった。神とは一体何であったのか。気付いたというよりは思い出したと言った方がよいかもしれないことだった。

「それが今こうやって壊れて」

「ガラクタになった」

壊れた機械はガラクタでしかない。そういうことだった。

「それだけのことだったんだな」

「ああ、本当にな」

そして誰もが言うのだった。

「それだけのことだったんだ」

こうして神はいなくなった。機械で造られた神はただのガラクタになって終わった。後はゴミとして捨てられスクラップとなってからは誰も知らない。それで何もかもが終わったのだった。災厄の記憶だけを残して。神のもたらした災厄を。

造られた神

完

2
0
0
9
.
4
.
8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702h/>

造られた神

2010年10月8日15時21分発行